中世辞書類における助数詞について

三保忠夫

目次

はじめに
一、資料
二、助数詞一覧表
三、中世故実書類における助数詞
むすび

はじめに

助数詞は、わが国の過去においても今日においても各層に広く用いられている接尾語の一種である。(1) 数量を表わす語(数詞)につき、その表現対象となるものごとの性質・形状・内容・種類などを端的に表現し、これをもってその数量表現をより正確に行おうとするものである。それゆえ、この種の表現は、要を得た短音節語、または、一、二文字程度のことばによって行われることがほとんどであるが、何といっても我々を取りまくものごとは多種多様であり、おのずから助数詞の種類は多く、用法も複雑をきわめているようである。

各時代・各資料において、助数詞にはどのような種類があり、どのような用法が認められるのか、また、これらに関

してはどのような問題が存在するのか、こうした点に興味をもち、先頃より筆者は若干の調査・分析を行ってきた。[2] ところが、これらの過程において困惑するのは、漢字で表記された個々の助数詞が具体的にはどんな国語（字音語を含む）を表わしているか、それがはっきりしないという点であった。それは音よみ・和よみのいずれなのか、いずれにしても何とよむのか、この助数詞のこの用法の時はどうよむのか――といった問題である。先学におかれても、個別的な若干の検討は行われてはいるものの、[3] 未だ十分な考察はなされていないようにみうけられる。[4]

助数詞のよみ方を求めるべく、訓点資料や仮名文学作品を用いるのは必ずしも最良の方法ではない。前者には、その原文自体に助数詞が出現しにくいという事情がある。[5] 後者もそうであるが、理由はおのずから相異する。また、助数詞が接尾語であり、原漢文に現われにくい存在であるとすれば、新撰字鏡、類聚名義抄、仏書音義といった古辞書・音義の類によっても得られるところは多くないであろう。

助数詞がよく出現するのは古文書類である。従って、仮名書きの古文書などは、そのよみ方を求めるのに一番都合よいかと思うのであるが、[6] 古文書は、本来、漢字を用いるべき性格のものであったとすれば、これも利用できる文書量（点数）等の面で問題がなくはない。[7]

こうして有力視されるのは、中世後半・近世初期の国語辞書やキリシタン資料の類である。この時期には、比較的多くの辞書類が編纂され、中にはその用法を説くものやローマ字書きのものもある。貴重な参考資料として期待されるところは大きいであろう。但し、何といっても時代は下る。ここをもって奈良時代、平安時代、あるいは、近世以降を考えるには、それなりの手続きが必要となろう。

本稿では、右のような経緯のもとに次のような検討を行いたい。

(イ)　中世辞書類にはどのような助数詞がみえているか

(ロ)　それらはどのような国語（よみ方）を表わしているか

(ハ) それぞれはどのような用法をもつか

(ニ) それらの助数詞に関してどのような問題が存在するか

辞書類には、その時代のことばのすべてが採録されているわけではない。辞書それぞれにはそれなりの編纂意図や採録方針もあったであろう。こうした辞書類に依拠しても、当時に存在した助数詞のすべてが網羅できるとは限らない。また、助数詞には、それが助数詞であると認定するに困難を伴うものがある。せっかく採録されていても、用例として収集し切れないこともあろう。注意すべき問題は多々あるが、中世辞書類における助数詞として、一度、総合的な整理を行い、その全体像を把握しておくことが必要であろう。

一、資料

中世辞書類として調査資料としたのは別紙(後掲)のとおりである。用例の多く得られるのは、中世後半期の節用集の類、また、キリシタン資料の類であるが、参考資料として色葉字類抄(三巻本)、伊呂波字類抄(十巻本)、江戸期の辞書若干(恵空編節用集大全、合類節用集、書言字考節用集)を加えた。

辞書類個々においては、得られる助数詞の用例も少なく、そのよみ方や用法も定かでないことがある。それゆえ、本稿では、この期の辞書類を総合して助数詞の用例数をそろえ、そのよみ方や用法をできるだけはっきりした形で利用していくこととしたい。

二、助数詞一覧表

本稿で助数詞というのは、「一脚机」(文明十一年本下学集)、「一張弓」(元亀本運歩色葉集)、「一番(ツガイ)鳥」(弘治二年本節用集)の類である。これに対し、「一机」「一弓」「一鳥」のような類は、「数詞+名詞」と認め、調査の対象とはしない。

助数詞の中には、容器や対処の方法(動作名)などから生じたものがある。例えば、本稿の以下に関連しては左記がある。

袋　帙　俵　簀　箱・筥　籠　盃　杯　串　折　荷　裏・包　結　束　駄　重　把　連

実は、これらの場合、(a)「数詞＋名詞」、(b)「数詞＋助数詞」のいずれであるかにつき、その判別は容易でない。両者は連続的なものであり、(a)から(b)への転成は、所詮は慣用の度合によるものと思われる。資料によっても(a)であったり(b)であったりといったゆれが認められる。本稿では、右は助数詞として扱い、次の類は助数詞の用例とはしなかった。

蓋　簀　茎　局　壺　言　紙　字　觴　杓　酌　声　席　樽　朶　軸　銚子　筒　方　盤　封　品　盆　甕　輪

列　匙　撈

より広く助数詞を収集していく立場からすれば、助数詞の範囲に入れていくことも可能である。しかし、辞書類における用例には文脈もなく、用法のはっきりしない場合も多いので、今回は留保することとした。

(1)　「資料篇」の作成

助数詞の分類は、その性格や用法(その対象との関係など)をもって行うのが最善であろうが、本稿のような目的からすれば、そのよみ方をもって行うことも許されよう。

どのような助数詞がどのようなよみ方で何を対象として用いられるかにつき、出典(調査資料名。但し略称による)を添えて示せば「資料篇」のようになる。大部につき、そのすべてが示せないので、今はその一部をもって例示とする(凡例のおよそも省く)。

資料篇

○　出典において対象が示されていない場合は—印で代用する。

○　出典に付訓がない場合は、類推等により、適当と認められる場所に掲出する。この時の出典には、右肩に△印を付す。

［一］群　字音語、字音語・和語両用法の助数詞　〈例〉

表記	よみ方	用法
字	ウ	堂舎（書）、家（P、R）、―（い、運、塵△）
羽	（ウ） はね は（わ）	鳥（運） 味方の甲（い）、冑（易、合）、―（運） 鳥（天、饅、恵、P）、白鳥、鶴（R）、猛禽類（P）、―（書）
腰（胷）	エウ こし ふり	刀（下△筑、下△文17、下△文11、塵△、饅）、太刀（明、弘、両、天、恵）、大刀（易）、タチ（P、R）、―（永） 刀（下春、饅）、太刀（明、弘、永、堯、黒）、太刀、刀（い△）、太刀、太刀（大カ）（運）、太刀、胡篠（書）、刀や短剣（P）、タチ、征矢、刀、脇差（R）、―（運、易） 太刀（増下、京、天）

［二］群　和語用法の助数詞

懸
かけ
鯛（増刊下、明、弘、永、黒、京、饅）、〈下略〉

(2)　助数詞一覧表

「資料篇」に基づき、その出典を省き、用法を要約したものが次の助数詞一覧表である。ここでは、右の［一］群を左記(一)、(二)に分けた。

(一)　字音語用法の助数詞

(二) 字音語・和語の両用法の助数詞

(A) 用法差のあるもの

(B) 用法差のないもの

(三) 和語用法の助数詞

[助数詞一覧表]

○ よみ方につき、あまり用いられなかったとみられるものに（　）印を付す。

○ 用法につき、私注を（　）内に示した。

(一) 字音語用法の助数詞

表記	よみ方	用法	実隆	延喜
字	ウ	堂舎、家	C	D
箇・ケ	カ、コ	香合、鼓筒、銭、樽、「数也」（調度、物品、容器）	C	B
階	カイ	官位、家の階層	B	A
合	ガフ	櫃、長持、折	C	D
基	キ	塔、塔婆	C	D
騎	キ	馬（馬上の人）	C	A
級	キフ	階（キザハシ）位、「塔ノ重々ノ数」（恵）、斬首	C	A
脚	キヤク	机、卓（ショク）、膳棚、梯（カケハシ）、菓子台、牀几	B	D
曲	キヨク	歌舞	C	A
句	ク	連歌、詩歌	C	A
躯	ク	仏像	C	A

具	グ	椀器、舟具・馬具の一揃、手袋一対、素襖袴の一組	C	C	D
管	クワン	筆、笛	B	D	か
軒	ケン	家屋	A	A	A
鉤	コン（コウカン）	鎹	A	C	A
献	コン	酒、肴	C	D	C
座	ザ	集会の回数	C	D	D
剤	ザイ	薬	A	C	C
荘	サウ	灸治	A	A	A
冊	サツ、サク	書、書物の巻や篇	C	A	A
匝	サフ	―（対象掲出なし）	C	A	A
尺	シャク	魚［鮎、鮭、鮒、鱈］	C	A	A
首	シュ	詩歌	C	A	A
巡・順	ジュン	巡番、連歌	C	B	B
村	スン	榑	A	D	D
隻	セキ	魚、鳥	B	D	D
膳	ゼン	椀、筋（ハシ）、折敷、食事用の台	C	A	A
層	ソウ	階層、品級、楼台、城櫓、塔婆	A	A	A
艘	ソウ	船	C	A	C
尊	ソン	仏像	C	A	A
駄	ダ	牛馬荷	C	C	C
帯	タイ	松明	A	A	A
體	タイ	仏像、デウス、彫像	C	A	A

代	ダイ	年代、一つの時代	C	A
段	ダン	文、説教、段階、階段	C	B
帙	チツ	書	C	A
挺	チヤウ	墨、蠟燭、鑓	B	A
丁	チヤウ	紙、材木、駕輿、鉏、鍬	B	A
通	ツウ	文（フミ）、書状	C	D
條	デウ	羅、帯、文書の条章	D	D
貼	テフ	薬	A	A
帖	デフ	畳、幕、肩袈裟、草子、紙（十帖＝一束）	B	A
（年	ネン	年数）	C	A
盃	ハイ	酒、水、飯、盃、容器、鮑貝・殻つきの貝	B	A
杯	ハイ	酒	C	A
輩	ハイ	蟹	D	A
（倍	バイ	増義）	A	A
鉢	ハツ	御器一杯の飯	A	A
盤	バン	碁、衆（シヤウ）（ママ）碁、双六	C	A
匹・疋	ヒキ	馬、四つ足の獣、牛、針の包み	C	B
（緡	ビン	銭）	C	A
部	ブ	書、文、経	C	C
瓶	ヘイ	酒、花	C	A
篇	ヘン	書物の部	A	A
補	ホ	薦（こも）	A	A

（二）字音語・和語の両用法の助数詞

（A）用法差のあるもの

両輛	リヤウ	鎧、具足、車	A	B
	リヤウ	車	A	D
羽	（ウ）	鳥		
	は（わ）	鳥、白鳥、鶴、猛禽類	B	A
	はね	味方の甲、冑		
口	ク	鍬、鎌、太刀、剃刀、鏡、磬、釜、鍋、工匠	D	D
	くち	釜、鞍、轡、一口に頬張る量		
串	（クワン）	念珠	A	A
	くし	豆腐、干し魚、干し柿、串鮑		
間	ケン	家、障子、戸板	C	A
	ま	座敷		
雙	サウ	屏風、瓶子、樽、馬の荷、沓、足袋、魚	C	A
	よろひ	屏風		
	つがひ	鳥		
支	シ	材木、榑	B	A
	えだ	長刀		
枝	シ	花、木の枝、巻数、筆、箭	B	B
	えだ	花木の枝、豚などの四肢、薙刀、長刀		

種	シュ	肴、種類	C	B
足	くさ	種類、［婦人語］	C	B
	ソク	履、鞋、足袋、鞠		
	もと	鷹		
	あし	歩数		
頭	ヅ	牛	B	B
	かしら	猪、鹿、瓜（十個）、舞、踊		
対	ツイ	筆、画、絵賛、徳利、瓶、錫、剃刀、箸などの対のもの	B	A
	くだり	肩衣、袴		
棹	デウ	駕	B	A
	さを	匱（ヒツ）		
番	バン	相撲、猿楽、碁、将棋、双六、舞、能、狂言など（の回数）	C	B
幅	つがひ	鳥（オス・メス一対）		
	フク	絵賛、懸字、絵像、掛物、布、幕	B	A
	はば	布、織物、板（などの幅）		
	（たばり）	布、木綿		
	（の	布幅）〈単位〉		
服	フク	茶、薬	C	A
	（よろひ）	馬賑（ムマヨロヒ）		
本	ホン	扇、鑓、針、柱、木材、旗、からかさ、木、草など	C	B
	もと	木、草、花		

目	モク	碁石、碁盤の目	A
	め	筵の目、網の目など	A
流	リウ	宗派、流派	B
	ながれ	旛、旗、幟、木の椀、膳	B
連(聯)	レン	数珠、銭、詩、聯歌、簾、串柿、串鮑、乾烏賊、干なまこ	B
	(つら)	―(対象掲出なし)	B
	もと	鷹	B

(B) 用法差のないもの(用法差未詳のものも含む)

腰	エウ	太刀、刀、短剣	C
	こし		C
	ふり		C
荷	カ	樽、薪、水、荷物	C
	(になひ)		C
	(に)		C
行	カウ・ガウ	行数	C
	ギャウ		C
	くだり		C
顆	クワ	玉、珠、小頭、鞠	B
	(かしら)		B
	(ふさ)		B

裹(包)	クワ(ハウ) つつみ	金、香	D	D				
回・廻	クワイ まはり (めぐり)	巡番、巡回、回転の数	C	A				
巻	クワン まき	経典、織物、昆布	C	C				
結	ケツ ゆひ (むすび)	結びからげたもの、(銭一貫)	D	A				
喉	コウ コン (のど)	魚(大きな魚)、肴	C	A				
筋	(ゴン) すぢ	絃、帯、紐、道、道義、矢(一本)	B	A				
色	シキ いろ	(種類)	C	A				
(日	ジツ・ニチ か	日数)	C	A				
炷	シユ・チウ たき	香	C	A				

所（處）	ショ ところ	場所	D	D
束	ソク （つか） （つかね）	紙（一束＝十帖）、薪、木、折敷など	B	B
袋	タイ ふくろ ヂウ	茶	C	A
重	かさね へ	小袖、棚、箱、塔、紙など	C	B
張	チヤウ はり	紙、琴、弓、挑灯、傘など	B	B
滴	テキ しづく しただり	水、酒、雨の滴り	C	A
畳	デフ （たたみ）	畳、暖席（ノンセキ）、席	C	A
度	ド たび （くら）	（回数）	C か	C か
人	ニン （た）り	（人数）	C か	C か

把	ハ たばね （たばり）	稲、薪、経、麻、藁、綿、草	B	B
尾	ビ を	魚	A	A
柄	ヘイ えだ （え）	扇、鎗、長刀、太鼓	B	B
	（から）	茶臼		
俵	ヘウ たはら	米、塩、麦、物の詰まっている俵	C	B
片	ヘン （へぎ）	折敷、茶、水引、香料	B	B
返・片（遍）	ヘン （かへり）	経、念仏など（回数）	C	C
	（かへし）			
歩	ホ あよみ	歩数	C	A
枚	マイ （ひら）	紙、板、鯛	D	D
面	メン （おもて）	鏡、硯、大皿、盤、琵琶、仮面など	B	D

粒	リフ つぶ	米・麦など五穀、丸薬、仏舎利	B	A
領	リヤウ （くだり）	具足、鎧、衣	A	D
籠	（ロウ） こ	炭、菓子、籠や鳥籠	D	D

（三）和語用法の助数詞

懸	かけ	鯛、魚、山鳥、雉、鐙、鞦、鞍下毛布	B	A
貝	かひ	練薬、蛤の殻	D	A
株	かぶ	松、草などの根とか株とか	B	D
	もと	沢蘭		
切・截	きれ	肉味、魚、物の断片	C	A
下	くだり	袴、肩衣、行数	A	A
頸	くび	蓑、雨合羽	A	A
入	しほ	（染色の度数）	A	A
簀	す	薯蕷（ヤマノイモ）	C	A
縷	すぢ	縄、葛、絲等	A	A
綮	すぢ	―（対象掲出なし）	A	A
手	て	的矢（一対）、碁石を打つ回数、技芸の所作・技を数える	B	A
箱・筥	はこ	―（対象掲出なし）	C	C
刎	はね	甲、敵の甲	A	A

帳	はり	蚊蝱（カヤ）、帷幕、几帳	A	A			
房	ふさ	花、葡萄、枇杷・山椒の房、花束、絹の房飾	C	A			
振	ふり（こし）	太刀	C	B			
丸	まる	紙十帖、（糸・綿・砂糖などの量や重さ）	B	A			
職	もと	鷹	A	A			
居	もと	鷹、猛禽類	A	A			
桶	をけ	弓絃百筋、また、十二筋	D	A			
折	をり	膳、鯛、鱈、鮒、布・絹・紙などの折り重ねたもの	C	B			

右の一覧表における用例数は、㈠五七例、㈡(A)一九例、(B)三四例、㈢二一例、計一三一例となる。これらの数字は最終的なものではないが、[8] 字音語用法に関わるものは一一〇例（＝㈠＋㈡、五九・八％）、和語用法に関わるものは七四例（＝㈡＋㈢、四〇・二％）となり、この比率は六対四となる。但し、これは漢字表記の上から数えた数字である。語数そのものからすれば、㈡(A)、(B)などは、それぞれその二倍余の数字となろう。

ところで、この㈡のグループにつき、このような両用法が当初から存在したとは考えにくい。即ち、これらの中には、もと㈠か㈢かのいずれかであったものが含まれているのではあるまいか（㈠、㈢についても他を出自とするものがあるかもしれない）。あるいは、㈠と㈢と、それぞれ別個の助数詞でありながら、たまたま表記を同じくするため、ここに同居しているものもあるかもしれない。今後には、そうした情況を解明し、㈠と㈢各々の意味するところを考えていかねばならない。

なお、中世辞書類における助数詞の性格の一端を窺うため、一覧表の下欄には、実隆公記[9]、延喜式[10]それぞれにおける助数詞と比較したところを次の符号によって示した。

A　実隆公記（また、延喜式。以下同様。）にみえないもの

B　実隆公記にもみえるが用法や用例が限られているもの

C　実隆公記にもみえるもの、および、用例の多寡によらず、あまり差異の認められないもの

D　実隆公記にみえる用法の方が多様であるもの、中世辞書類では用法や用例が限られているもの

(E　中世辞書類（一覧表）にみえないもの)[11]

実隆公記にみえて中世辞書類にみえない助数詞（E）は次のものである。

(イ)　容器・対処方法を単位名とするもの

　檻　綺　器　結・括　夾　壺　縒　盞　唱　続　樽　筒　拝　封　編　盆　礼

(ロ)　性質・形状等を単位名とするもの

　韻　音　蓋　紀　局　割　官（管か）　茎　戸　刻　才・歳　載　紙・帋　旬　声　朶　紐・紉・紱　軸　陣　点　董　筆

　鋪・補　名　列

(ハ)　運動の回数・頻度等を表わすもの

　周

延喜式にみえて中世辞書類にみえない助数詞(E)は次のものである。

(イ)　容器等を単位名とするもの

　案　蔭　坩　壺　擔　櫃　缶　瓰　編　鬘（ママ）　輿　輿籠　壥

(ロ)　性質・形状等を単位名とするもの

　員　院　葉　烟　蓋　藁　竿　龕　胸　戸　炬　根　襲　社　節　柱　町　鋪　捧　舁　了

中世辞書類と延喜式とでは、漢字表記を異にするとみられるものもある。即ち、前者の「鉤」、「膳」、「挺」、「羽」、「懸」、「重」と後者の「勾」(D)、「前」(B)、「廷」(B)、「翼」(B)、「架」(B)、「襲」(B) との関係がそうである。

中世辞書類における助数詞の性格が、他資料との比較によって浮び上ってこよう。と同時に、助数詞そのものにつき、大小様々な問題のあろうことにも気付かれよう。(12)

三、中世故実書類における助数詞

中世には、諸儀式や作法等についての故実書が数多く編述され、ことばに関する諸問題とともに、いわゆる助数詞も、ここにおいて触れられることがあった。馬具寸法記、道照愚草、書簡故実などは、そうした資料として特に注目されるが、これらはまた、辞書類だけではとうてい知り得ない用法を伝えるものとして重要視されるのである。

次には、故実書類から窺えるそうした用法の若干について言及しておきたい。(13)

(1) 文書語としての助数詞

故実書類が助数詞を取り上げるのは、その用法についての注意を喚起するためであることというまでもない。だが、それ自体、何の必要あってのことかといえば、それは書簡作法のためであった。即ち、当時、書状や目録、進上の折紙などを執筆するには、助数詞についての知識・教養が不可欠であったのである。

道照愚草（続群類、二四下）は、伊勢流の武家故実礼法書で、伊勢貞久（道照）が貞宗・貞陸以来の家説をもとにして筆録したものを貞順・貞昌等が整理・補筆したものとされる(14)（天文頃〈十六世紀中葉〉の成立か）。助数詞についての一条もあり、ここには次のようにみえる（用例の冒頭の○印は私意。以下同様）。

○　諸道具数書事

鞍　一口（イック）　鎧　一懸

手綱腹帯一具　鞍　一懸　〈中略〉

狸　一疋其外何も四足の物を何疋と云

目録などには。狸一兎一と書く。狸ハ進上には不成。

鷹　一連（モト）一居（モト）一職（モト）何も一もと、よむなり。

旗　一流　一幕（衍か）　一畳（一畳とはニツの事也）

その対象を細かく掲げ、用いるべき助数詞が示されている。その数は実に三十九種（異なり）にも及び、この用例数は故実書類の中でも群を抜いている。注意されるのは、事書にも「諸道具数書事」とある点で、助数詞は、文書用語の一として重視されていたことがわかる。

書簡故実（続群類、二四下）は、書札礼に関する故実書で、天正年中（一五七三―九一）の成立とされる（作者未詳、諸家によるか）。さまざまな書状類の調え様が示されているが、この中にも次のようにみえる。

○　一馬道具書状に可調様事。

鞍一口。輿一口。鐙一足。一懸。切府（ママ）一疋分。

力革一具。鼻革一間。手綱一具。一筋。

策一ツ。奉射のゆかけ（ママ）。かた〳〵　馬上のゆかけ一具。

弦一筋。弦一張トハ七筋也。一桶トハ廿すち也。

又鞠をハ一丸（トモ）。一顆共可書。

一菟ハ一耳二耳と可書。一疋二疋とハ悪し。但一耳とハ二の事也。一ツをハ片耳と書也。一ツ二ツとハ可書不苦。

鷹犬をハ一牙加様にかくへし。

「書状」をしたためる場合、その文言を如何様に用いるかが大切であり、その一端として助数詞にも触れられているのである。以下も同様であるが、助数詞は、この意味で文書語としての性格が強かったと知られよう。(15)

(2)　女房衆と助数詞

故実書類には女房に関わる記述も多い。例えば、宗五大艸紙（群類、二二）は、大永八年（一五二八）正月、足利義政以下四代の将軍に仕えて殿中武家の礼法に通じた伊勢貞頼（宗五、七四歳）の手になるが、この中に次のようにみえる。

○　一女中へ進上の折紙調様。万びき又ハ千びきなど有べし。又名乗ハ上ノ字をかなに下をばまなに可レ書。名字官途もかなまなを交べし。私にて女房衆への折紙此分也。又ぼん。かうばこ。どんす以下もかなに書べし。だんし十帖。引合杉原も十でうとかくべし。おりたる以下の折紙をもまなをまぜてかくべし。

一公方様へ折樽以下進上書やう。御盃台。絵様可レ付。数不レ定。御折十合。数不レ定。押物五合。数不レ定。御樽十荷。数不レ定。京にてハ柳なれバ柳何荷共書。又御樽。天野何荷共書。是も私へならば御字あるべからず。是も女中へハかななるべし。

折紙とは、礼紙を節約するため、本紙を上下に折り、裏に折り返した方をその代りとした書状である。中世以降に発達した様式で、室町時代の進物・贈物の目録にはみなこれが用いられた。右は、女房衆へのそれは「かなまなを交べし」というのであり、贈遣に用いられる檀紙・引合（ひきあわせ）紙・杉原紙、また、折・樽などの単位（助数詞）も「まなをまぜてかくべし」とされている。

女房進退（続群類、二四下）は、女房衆の躾覚書で、室町末期から江戸初期の頃の成立とされる。

○　一人の御そんしありたる事なれ共。もしあやまりも有物也。伊勢殿の書物にもあり。絹をハ一疋二疋といへり。又は女はうなとは。一巻。二まき。十まき。二十巻といへり。

一いたの物をは。一たん二たんといへり。女はう衆は。一ツ二ツといへり。

一布をは。これも一たん二たんといへり。女はう衆は。一ツ二ツといへり。〈中略〉

一すきはらなとを人にいたすに。杉原を一帖ツ、右ひたりから引合て。さて十帖かさねて。杉原八枚。〈中略〉

文なとに書候時にハ。拾帖弐拾てうとかき候。おとこなとも其分也。さかりたる所へハ。壱束二そくとかくへき也。かきやう又ハこしらへやうくてんあり。

一中おりなとも。二束三そく迄ハ。弐拾てう三拾帖なとゝいへり。そのほかは。四束。五そく。拾束。二十そくといへり。壱さをといふ事。あき人のいふことはなり。

一とりの子なとは。一てう二てう。又ハ壱束なとゝいふ事なき事に候。一枚。弐拾枚。百枚なとゝいへり。

一たんし。みきやうしよなとも。拾てう。弐拾帖といへり。引合なとは。五拾枚。百枚なとゝいへり。

これにも、仮名・漢字を交用すべきだとあり、こうした「かきやう又ハこしらへやう」の「くてん（口伝）」を踏襲した「文なと」の写しや控えは、また、故実書類の随所にみえている（女房筆法、御産所日記、飯尾宅御成記、など）[16]。

助数詞は、ふつう、対象によって使い分けられるが、同種のものでもその種類・品種によって、また、その数量によってさらに細かく使い分けられることがあった。即ち、右によれば、同じく紙を数えるについても、杉原紙（「枚」も）、中折紙、檀紙、御教書などは「帖（でふ）」「束（そく）」（十帖＝一束）、しかし、鳥の子紙、引合紙は「枚（まい）」（何十枚、何百枚でも）とそれぞれ相異なる助数詞を書くといい、また、中折紙なども、二、三十帖までは「帖」を用い、四十帖以上は「束」を用いるというのである。

これに加え、「さかりたる所（下）」へ用いる助数詞や「あき人（商）」の用いる助数詞（「壱さを」）もあったというから、助数詞は、その対象、品種、数量、使用場面、使用者などによって使い分けられていたことになる。

もっとも、こうした故実書にみえるすべてのことが、時、所、人（性）を問わず行われていたかどうかについては疑問もある。右にも先の宗五大艸紙との間に小異がみられるが（引合紙の助数詞）、このような問題については、今後の調査によって解明していかねばならない。

ところで、女房に関しては、また、助数詞の用法上、男性と異なる点のあることに注意される。即ち、先の女房進退には、絹を「一疋二疋」というところ、「女はうなとは。一巻。二まき。十まき。二十巻といへり。」とあり、織物の板物や布を「一たん二たん」というところ、「女はう衆は。一ツ二ツといへり。」とあった。「疋」や「たん」（反、段）はき

わめて基本的な布帛の単位であり、男女の差なく使用されたはずであるが、女房などは、平常「巻（まき）」で通用し、また、単位を用いないことがあったというのである。そこでは、軟かいことば遣いが好まれたということであろうか。

馬具寸法記（群類、二三）は、室町時代の故実書で、馬具や弓箭等について明細な寸法を記した書である。その一条に、「一ゆがけ一具。むち一筋。」以下、多くの助数詞用法が示されていて注目されるが、ここに一例、「盆一枚。女中へは一ツ也。」とみえる。これは、女房への進上目録、進物注文などでは「盆一枚」でなく「盆一（ツ）」と書くべきことを示したものである。

伊勢貞興返答書（続群類、二四下）は、元亀三年（一五七二）、武具や装束等についての伊勢流故実を伝えようとして成ったもので、ここにも次のようにある。

○　目録事

しん上（改行）／御かうはこ　一云々／御ほん　一（かなの時は。枚の字あるましく候。数を進上時は。一二とあるへし。）／三千ひき　／　以上　／　大うち左京大夫／　よし興

道照愚草にも次のようにみえる。

○　香合　一　盆　一枚（かなの時一とはかり）

助数詞の用法に関しては次の類も次項の類もあるが、今の場合は単なる用法差でなく、男女間のそれに関わる位相上の問題である。

○　一かりまたを。常に人の。一まい二まいなとゝ申候事わろし。一ツ二ツたるへし。（岡本記[17]、続群類、二三下）

女房たちの世界に助数詞の用いられない傾向のあったことは、平安仮名文学作品によっても窺えるかもしれない。即ち、時代は遡るものの、この分野における助数詞は、その種類も乏しく、使用頻度も低い、また、「事物を数えるに当た

って接尾語「つ」系列の助数詞を用いて、特定の助数詞によらない方法」が広く行われており、古記録における場合（「特有の助数詞を使用し書記するのが原則であった」）とは顕著な相違が認められると指摘されているのである。[18]

古記録と仮名文学作品との間におけるこのような相違は、おそらく「文章語対口頭語」という、それぞれの基盤をなす言語の性格の相違に基づくものと推測されている（同書）。文章語の中における助数詞の立場は、また、独自のものであったかと思われるが、この点については、さらに考えてみたい。

(3) 目録の調え様と助数詞

贈遣目録の調え様（書き様、こしらえ様）についてはこれまでにもみてきた。執筆者としては最も気を遣う書状であり、そのためか、ここには助数詞についての去嫌いもあったようである。

○ 一精進之物。魚鳥とならへて参候事。不及見候様に候。前後之儀。何にても不苦候哉。〈中略〉桶に入候物。進物に書付は。一桶十桶なとゝ書へし。鳥ハ何鳥にても前に書へし。次第ハ白鳥一。鶴一。鴈五。雉十なとゝ有へし。何鳥にても数有へし。魚をも数を可書。但鯛一折なとゝも有へし。鯉五。なとゝハ書也。五喉なとは悪し。又一かけなとも不宜候。鮭をハ五尺十尺。又壱尺なとゝ書也。赤荒まてハ。数を二十三十と可書也。折紙にいくつもあれ。樽の添候時ハ。奥に書へし。（書簡故実、既出）

○ 一肴の目録に。鳥幾つかひ。魚なんこんと書事わろし。鳥は一ツ二ツと書。鯉なとは一折とも。亦一ツ。二ツ。十。廿なと書へし。鯛鮒なとの類も同事也。（酌并記[19]、続群類、二四下）

○ 魚之数唯（ママ）之字事。（曽我兵庫頭八十五ケ条品々不好事[20]、続群類、二四下）

○ 一魚を一かけ二かけと申事なき事ニて候。一ツ一ツ（ママ）と其数を申か能候。（伊勢六郎左衛門尉貞順記[21]、続群類、二四下）

進物の目録はどのように書くか、順序はどうか、単位（助数詞）は何と用いるかが問題とされ、桶に入れた物は「一桶」

と書き、鳥・魚は「数」（一ツ、二ツ……）を書く、魚（鯛、鯉）は「一折」とも書き、鮭は「壱尺」と書くが、鳥に「番」、魚に「喉」「懸」を書いてはならないとある。

「桶」や「折」は、容器名から転じた助数詞、「番」（羽鳥一）や「喉」（大魚一尾）、「懸」（中位の魚一尾）、「尺」（尾鮭一）は魚鳥を直に数える助数詞である。魚鳥を直接的に数えず、容器をもって間接的に数えるのがよいとされたのであろうか（しかし、「尺」が問題となる）。それとも、後者には、書状には適さない口頭語的性格でも認められ、そのために嫌われたのであろうか。その理由は未詳だが、目録を書く場合、それらは使用を避けるべき助数詞であったことが知られる。

関連して、女房筆法（既出）にも次がある。

○　もくろくとゝのへやうの事。

しん上。／かん（鴈）　二。／たい（鯛）　一おり。／にし（雑か）　一おり。／御たる　十か。／　以上／　いせう（の）京すけ／　さだ遠

この「たい　一おり」の下あたりであろうか、細字で「たい。ふな。こいなとは。かすもおほく候て。見たてもよく候て。かすをかくへし。たいふなは。十より上は。十まいと。まいの字をかきてもよし。」と注記されている。

これに類する表現は、伊勢兵庫守貞宗記（ママ）[22]（続群類、二四上）にもみられ、魚の助数詞は「大略一折ニて候」うが、鯛、鯉、鮒、鱈などは「見たて可然候へは。数を書候事にて候。」とある。「折」「（数）」の他、「枚」（十尾以上）も許されるようだが、「懸」「喉」などを用いてよいとするものは見当らない。

なお、右の貞宗記には、「一折と書て脇に員数を書候事有間敷。」ともみえ、「折」と「（数）」とはともに用いてはならないとある。

以上、中世故実書類にみえる助数詞の若干についてみてきた。中世辞書類に示されているように、助数詞は、原則としてその対象によって使い分けられる。しかし、辞書類にみえるからといって、それらがそのまま使用されていたわけではなさそうである。そもそも、そうした助数詞がどのような性格のことばであったのか、実際の運用はどのように行

われたのか、こうした実質的な問題を考えさせてくれるのが、中世故実書類ではなかろうか。中世故実書類は、同期の辞書類とともに、助数詞研究上、貴重な資料として注目されよう。

むすび

中世辞書類に助数詞が採録されているのは、当時の人々が、これにつき、大小の関心をもっていたからである。これをたぐっていけば、彼らが如何なるものごとに如何様の興味を、何ゆえにいだいていたか、を知ることができよう。しかし、問題はそれだけに留まらない。上代から今日までにおける助数詞につき、その総体を把握し、その歴史的展開を究明するためには、中世辞書類における助数詞は、是非とも整理しておかねばならないであろう。

本稿では、まず、中世辞書類における助数詞を収集し、それらがどのようなよみ方で、どのような用法にあるのかを調べた。日本語における助数詞は、本来的には字音語用法か和語用法かに二大分され、その二者それぞれに分析したところをもって「日本語における助数詞」を究明することになろう。

今回は、各種の辞書類を総合的に扱った。今後にはこれをさらに充実させ、より多くの辞書類を参照し、用例の収集に務めねばならない。しかし一方、辞書類各々にはそれなりの編纂意図や基準、また、性格や傾向といったものもあると考えられるので、その各々についての個別的検討・分析も課題となってこよう。この度は触れるべくして触れられなかったが、例えば、日葡辞書には口頭語的な助数詞が数多くみえている。先に、助数詞は文書語的性格が強いと述べたところと矛盾しそうだが、注意してみると、これらは生活用具や容器、日常的な人の動作・対処方法などに基づく自然発生的な助数詞であって、いわゆる漢語出自の助数詞ではないようである。日葡辞書にこの種の助数詞の多いことは、同辞書の特徴の一として尊重すべきであるが、これを分析することにより、日本語における和語系助数詞の成り立ちや性格を考えることができそうである。

中世辞書類における助数詞の性格や特徴は、各分野、各層におけるところと比較・対照することによってはっきりしてくるであろう。そこには年代性の問題、文書語と口頭語との問題、また、男女の位相や社会の上下階級の問題、故実や方言の問題等々が関与してきそうであるが、同時に、中世辞書類の限界もみえてくるであろう。そうした意味で、右には、実隆公記や延喜式との比較の一端を示したが、その結果を述べるだけの余裕をもたなかった。今後には、故実書類も含め、より多くの資料との比較・検討を行い、中世に前後する時代も視野に入れながら、細かな観察を重ねていかねばならないであろう。

（一九九二年八月二十八日）

注

(1) 関連するものに度量衡の単位（数量計算の基準となるものの名）があるが、本稿では対象としない。

(2) 拙稿「古文書における助数詞(一)」、『島根大学教育学部紀要』、第二三巻第一号、一九八九年七月。「(同)(二)」、『(同)』、同第二号、同年一二月。「奈良時代の寺院縁起資財帳における助数詞の考察」、『古代語の構造と展開』、一九九二年六月。

(3) 田村悦子「藤原佐理書状去夏帖について――樽の単位は材か村か――」、『美術研究』、第三〇八号、一九七八年一〇月。長節子「中世の魚の助数詞「こん」の消長」、『鎌倉遺文』「月報34」、一九八七年八月。

(4) 左記には、古記録、今昔物語集、仮名文学作品等における助数詞について論述されているが、そのよみ方については全く触れられていない。
峰岸明「今昔物語集における助数詞の用法(一)」、「(同)(二)」、『文学論叢』第三五・三六輯、昭和四二年。同著『平安時代古記録の国語学的研究』（一九八六年二月、東京大学出版会）、第二部、第二章、第三節。

(5) 拙稿「居延簡牘資料における量詞の考察」、『島根大学教育学部紀要』、第二四巻第二号、一九九〇年一二月。また、注(2)の末尾文献。

(6) 島根大学教育学部国語学ゼミナール「後鳥羽上皇逆修僧名等目録における助数詞について」、『島大国文』、第一八号、一九八九年一一月。

(7) 仮名文書は中世以降に下りがちである点、また、逆に相当する漢字表記の不明である点などにも問題がある。

(8) 今後の検討如何では若干の増減も生じようし、調査資料を広げていけば助数詞の用例も増えよう。「巡-順」「匹-疋」「裹-包」「回-廻」「所-處」「返-反-遍」「切-截」「箱-筥」など、今は同じものとして数えているが、それぞれ別扱いとすることも可能

である。

(9) 山内洋一郎「中世における助数詞について――その一『実隆公記』に見る数量表現――」（『広島文教女子大学研究紀要』、第五巻、一九七一年三月。底本は、続群書類従刊行会版）による。

(10) 拙稿「延喜式における助数詞について」、別稿。注(4)文献（峰岸著書）にも言及がある。

(11) 今回の収集範囲の中にみえないもの、の意。

(12) 紙面の都合上、詳しくは別稿に譲る。

(13) 詳細については、別稿「中世故実書類における助数詞について」に譲る。

(14) 作者、成立年代等については『群書解題』、第三巻（昭和六一年四月、第四版）による（以下同様）。

(15) 他方、口頭語的色彩の強い助数詞もある。

(16) 女房筆法は、女房に関する故実書。足利時代末期から江戸時代初期の間に成立か（続群類、二四下）。次は、武家故実書で、足利時代中期、幕府の医者安芸氏の手に成る（群類、二三）。次は、寛正七年（一四六六）二月、足利義政が飯尾肥前守之種（一四二三―七三）宅に臨んだ折の記録書である（群類、二二）。

(17) 天文一三年（一五四四）一二月、岡本美濃守縁侍の手に成る小笠原流系の武芸故実書。

(18) 注（4）文献（峰岸著書）、六二七、六三七頁。

(19) 室町時代後期の宴会作法書。天文・永禄年間（一五三二―六九）に足利義輝に近仕した伊勢貞順の作。なお、鳥板記（武家の礼法故実書。続群類、二四下）にもこれと同じ文言がみえている。

(20) 天正（一五七三―九一）の頃か、曽我兵庫頭（尚祐の父）の作。

(21) 武家の礼法故実書。天文頃、伊勢貞順作。

(22) 伊勢流の武家礼法故実書。貞宗（一四四四―一五〇九）の作。

〔付記〕本稿をなすにあたり、鎌倉時代語研究会平成四年度夏期研究集会において、小林芳規先生をはじめとする御出席の各位、また、山内洋一郎先生の御指導、御高配をいただいた。記して謝意を表したい。

調査資料・参考資料

（略称）　（資　料　名）

色　色葉字類抄（三巻本）　もと二巻本、治承（一一七七～八一）の頃に増補、前田本・黒川本（員数部）による、中田祝夫、他編『色葉字類抄研究並びに索引』、昭和三十九年六月発行、風間書房刊による、

伊　伊呂波字類抄（十巻本）　鎌倉初期成、大東急記念文庫蔵、室町初期写（畳字部）、昭和六十二年五月復刻発行、雄松堂出版刊による、

筑　筑波大学附属図書館蔵古本下学集、

＊　以下の四本は中田祝夫・林義雄著『古本下学集七種研究並びに総合索引』、昭和四十六年一月発行、風間書房刊による、（数量門の部）

春　春林本下学集　国立国会図書館蔵、

文17　文明十七年本下学集　筑波大学国語学研究室蔵、文明十七年（一四八五）書写、

文11　文明十一年本下学集　静嘉堂文庫蔵、文明十一年から永正二年までの二十六年間の内に書写されたもの、

増刊下　増刊下学集　室町中期、文明頃写（イ部・ヒ部の数量・言語部）、天理図書館善本叢書　和書之部　第五十九巻、昭和五十八年一月、天理大学出版部刊行による、

明　文明本節用集　文明六年（一四七四）の頃に下学集をもとに再編成され、延徳二年（一四九〇）・明応三年（一四九四）の頃書き継がれていったとされる（数量門）、中田祝夫著、昭和四十五年七月発行、風間書房刊による、

弘　弘治二年本節用集　東京大学附属図書館蔵（南葵文庫旧蔵）、天文十五年に稿なったものを弘治二年（一五五六）に改めたもの（イ部・ヒ部の数量門・言語進退門）、

＊　以下の四本は中田祝夫、他著『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引』、昭和四十九年三月発行、勉誠社刊による、

永　永禄二年本節用集　大阪府立図書館蔵、永禄八年（一五六五）以後間もなくの書写、

堯　堯空本節用集　宮内庁書陵部蔵、永禄八年を過ぎる余り遠くない頃の書写加筆、

両　両足院本節用集　建仁寺両足院蔵、建仁寺住持利峰東鋭（寛永二十年〈一六四三〉七月寂）の書写にかかる、

塵　塵芥　清原宣賢（天文十九年〈一五五〇〉歿）自筆、室町後期（巻末の名数語彙、数量門）、京都大学文学部国

語国文学研究室編、昭和四十七年十月発行、臨川書店刊による、

い　いろは字　妙本寺蔵、永禄二年（一五五九）写、上巻（イ〜ク部）欠、（ヒ部、また、巻末の名数語彙）、鈴木博著、昭和四十九年五月発行、清文堂出版刊による、

運　運歩色葉集　元亀二年（一五七一）写、（イ部・ヒ部）、京都大学文学部国語国文学研究室編、昭和四十四年十二月初版発行、同六十三年一月再版発行、臨川書店刊による、

黒　黒本本節用集　室町末期写、尊経閣叢刊複製本、

＊　以下の五本は亀井孝・高羽五郎編『五本対照改編節用集』下、昭和四十九年十一月発行、勉誠社刊による（イ部・ヒ部の数量門・言語進退門）、

京　伊京集　室町時代写、国会図書館上野支部複製本、

天　天正十八年本節用集　東洋文庫蔵、天正十八年（一五九〇）刊、貴重図書影本刊行会複製本、

饅　饅頭屋本節用集　東京教育大学（筑波大学）附属図書館蔵、室町末期写、珍書保存会複製本、

易　易林本節用集　慶長二年（一五九七）原刻、亀井孝蔵、平井板、

恵　恵空編節用集大全、無窮会神習文庫蔵、延宝八年（一六八〇）刊、中田祝夫著、昭和五十年三月発行、勉誠社刊による、

合　合類節用集　国立国会図書館亀田文庫蔵、延宝八年刊、中田祝夫著、昭和五十四年二月、勉誠社刊による、

書　書言字考節用集　享保二年（一七一七）版、（数量門の部）、中田祝夫・小林祥次郎著、昭和四十八年三月発行、風間書房刊による、

P　日葡辞書　慶長八年（一六〇三）、長崎学林にて日本イエズス会刊行、翌年補遺の部刊行、土井忠生・森田武・長南実編訳、一九八〇年五月発行、岩波書店刊による、

R　日本大文典　J・ロドリゲス著、慶長九年（一六〇四）から同十三年までに長崎学林にて刊行、土井忠生訳、一九八〇年四月、第六刷発行、三省堂刊による、

C　日本文典　D・コリャード著、寛永九年（一六三二）羅馬にて刊行、大塚高信訳、昭和三十二年九月発行、風間書房刊による、